

【慈恵看護教育 130 年によせて】

## 有志共立東京病院看護婦教育所 最初の看護指導者ミス・リードの生涯

芳賀 佐和子 住吉 蝶子

東京慈恵会医科大学医学部看護学科客員教授

### THE LIFE OF M.E. READE: THE FIRST TEACHER OF NURSES IN THE YUSHI KYORITSU TOKYO HOSPITAL

Sawako HAGA and Choko SUMIYOSHI

*The Jikei University School of Nursing*

The Yushi Kyoritsu Tokyo Hospital Training School for Nurses was established by the Japanese physician Takaki Kanehiro as the first educational institution for nurses in Japan. Takaki Kanehiro invited M.E. Reade as the first teacher of nurses. M. E. Reade, an unmarried female missionary of the Presbyterian Church's Woman's Board of Foreign Mission, arrived in Japan in October 1881 and returned home in 1888. After working at 2 mission schools for girls in Tokyo, in October 1884 she began to teach sanitation and nursing to Japanese nurses at Yushi Kyoritsu Tokyo Hospital and was the first teacher of nurses for 1885 to 1887.

The year 2015 was the 130<sup>th</sup> anniversary of the founding of The Jikei Nursing School. The continuing nursing education owes much to the work of M. E. Reade. So, we would like to examine the personal history of M.E. Reade.

Previous studies of the life of M.E. Reade did not reveal her full name or the dates of her birth and death. Therefore, the goal of this article was to examine the life of M.E. Reade by drawing on the records of the graveyard and the members of the Reade family. The full name of M.E. Reade was Mary E. Butler Reade (M.E. Reade). She was born in New York in 1860. She grew up as an adopted daughter of Hezekiah Lord Reade and Faith B. Partridge Reade in the state of Connecticut. She visited Japan when she was 21 years old. She was killed, with 20,000 other persons, by the massive eruption of the volcano Mont Pelée in Saint-Pierre on the island of Martinique on May 8, 1902.

(Tokyo Jikeikai Medical Journal 2016;131:49-58)

Key words; history of nursing, history of nursing education, M.E.Reade, Takaki Kanehiro

#### I. はじめに

有志共立東京病院看護婦教育所は、明治18年(1885)に日本で最初の看護婦教育機関として高木兼寛によって開設された。当時の日本では看護指導ができる人材は皆無であった。そこで高木兼寛は、来日中であったアメリカ長老教会の宣教師・教師・看護婦であるミス・リード (Fig. 1) に看護の指導を依頼した。

2015年に「慈恵看護教育130年」を迎える事ができたのは、リードの努力によるところが大きいと考える。そこで、アメリカから来日し、日本で最初の看護教育の指導者となったリードに関する

個人史を明らかにしたい。

リードに関する先行研究としては、平尾真智子・芳賀佐和子・小檜山レイの研究があり、日本での活動の一端は明らかになっているが、生涯を辿る上で大切な出生と死亡およびフルネームはわからなかった。また、リードがどこで看護教育を受けたかも課題として残されていた<sup>1)</sup>。

本稿では、『東京慈恵医院報告』や宣教師の本国への書簡、米国長老教会婦人伝道局年報や婦人伝道局機関誌等の基礎資料と、リード家の墓所と家族に関する新たな資料をもとに、リードの生涯について日本滞在7年間を中心に述べる。



Fig. 1. ミス・リード

## II. リードのフルネームについて

リードの名前は、Mary E. Readeであろうと考えていたが、特定できなかった。それは、リードの名前がいろいろな綴られていたからであった (Table 1)<sup>1)</sup>。

リードの墓石 (Fig. 2) には M. E. Reade と刻まれ、墓地の記録には Mary E Butler Reade と記載されていた (Table 2)。また、リードの養父 Hezekiah Lord Reade の新聞 (死亡記事) と彼の業績を紹介している本 (後述) の中では、Mary Ella Butler (Reade) と記されている。いずれにしても Miss Reed や Miss Mary L. Reede や Miss M. E. Read ではないことがわかった。

リードの旧姓は Butler であったが Reade 家の養女となり姓が変わり、Mary Ella Reade (Butler) つまり M. E. Reade となった。しかし、リードが養女になってからも旧姓を使う場合は、Mary Ella Butler Reade と表記したことも考えられる。

## III. リード家の墓所

リード家の墓所は、Jewett City Cemetery (Jewett City, New London County, Connecticut, USA) の Lot52 という区画にあり、墓所にはリードと養父母の墓がある。

Jewett City Cemetery の記録には Table 2 のように記載されている<sup>注1)</sup>。この記録から、リードは Mary E Butler Reade であること、1860年にニューヨークで生まれ、1902年5月8日に New London County, Connecticut, USA で死亡したことが判明した。また、リードは、Hezekiah Lord Reade と Faith

Fig. 2. リードの墓石  
Jewett City Cemetery

<http://www.findagrave.com/cgi-bin/fg.cgi?page=gr&GRid=126675406> (2014年9月12日 Therese Fenner Boucher 撮影)

|                        |
|------------------------|
| M. E. READE            |
| A FOSTER CHILD OF      |
| H. L. & F. B. P. READE |
| KILLED                 |
| BY FIRE FROM           |
| MT. PELEE IN           |
| HARBOR OF ST. PIERRE   |
| ISLAND OF MARTINIQUE   |
| MAY 8 1902             |
| A MISSIONALY IN        |
| JAPAN SEVEN YEARS      |

Fig. 3. リードの墓碑銘

Table 1. リードの名前が掲載されている資料と表記

| 出典                            | 名前の表記                    |
|-------------------------------|--------------------------|
| 宣教師の手紙                        | Miss Reade               |
| 米国長老教会ニューヨーク婦人伝道局年報           | Miss Reade または Miss Reed |
| 米国長老教会フィラデルフィア婦人伝道局年報         | Miss Reade               |
| 米国長老教会海外伝道局年報                 | Miss Mary L. Reede       |
| 米国長老教会ニューヨーク婦人伝道局機関誌          | Miss M.E.Reade           |
| 新聞「The Japan Gazette」1881     | Miss M. E. Reade         |
| 新聞「THE Japan Weekly Mail」1888 | Miss M. E. Read          |

B Partridge Reade の養女であった。

リードの墓石 (Fig. 2) には Fig. 3 に示す文字が刻まれており、これによって死因が判明した (後述)。

#### IV. リードの養父 Hezekiah Lord Reade について

リードは21歳という若さで来日し、2年間無給で有志共立東京病院看護婦教育所の教育にたずさわわり、看護婦の教育に必要な品々を寄付している。その品物はコネティカット州から送られたものである (後述)。これらのことから、リードは両親からの多大な支援を受けていたのではないかと考え、養父について調査した。

リードの養父 Hezekiah L Reade (Fig. 4) は、1827年10月1日に Lisbon, New London County, Connecticut, USA で生まれ、1903年1月28日に死亡した (Fig. 5)。死亡時の住所も New London County, Connecticut, USA であり、ニューロンドン郡で生涯を送った。

Hezekiah の死亡を知らせる新聞記事が1903年1月29日に掲載された<sup>2)</sup>。要旨を Fig. 6 に示す。

さらに、Hezekiah の人物像について『Genealogical

and Biographical Record of New London County, Connecticut』(1905年刊)と『Men of progress; biographical sketches and portraits of leaders in business and professional life in and of the state of Connecticut』(1898年刊)に書かれている内容の概略は次の通りである<sup>3) 4)</sup>。

1903年1月28日に亡くなった Hezekiah L. Reade は、コネティカット州東部のもっとも著名で有能な人物の一人である。製造業、財務、文学的事業、すべてにおいて秀で、人を指導する才能に際立ち、さらに、すばらしいエネルギーと、人類を道徳的により高める改革を行う能力を持っていた。

##### ・祖先

リード家の祖先は、ニューイングランド植民地初期、イングランドからマサチューセッツ州に移住した。彼はまもなくコネティカット州の Norwich に移住し、そこで、有名なモヒカン族の酋長から土地を購入した。この土地はいまだにリード家の所有地である。

##### ・教育

1827年10月1日に生まれ、Lisbon の普通学校で教育を受け、Jewett 市のいくつかの学校と Plainfield

Table 2. Jewett City Cemetery の Mary E Butler Reade の墓所の記録

|  |
|--|
| Birth : 1860 New York, USA   |
| Death : May 8, 1902 New London County Connecticut, USA   |
| Mary E Butler was a foster daughter of Hezekiah Lord Reade and Faith B Partridge Reade<br>Records show that she used the surname Reade |
| Family links:  |
| Parents:   |
| Hezekiah Lord Reade (1829–1903)  |
| Faith B Partridge Reade (1822–1904)  |
| Inscription:   |
| foster child of H.L. & F. B. P.  |

Fig. 4. Hezekiah L. Reade<sup>4)</sup>

Fig. 5. Hezekiah Lord Reade の墓石  
Jewett City Cemetery  
<http://www.findagrave.com/cgi-bin/fg.cgi?page=gr&GRid=16122123>. (2014年9月12日 Therese Fenner Boucher 撮影)

Hezekiah L. Reade 氏 75 歳で他界する  
先祖の土地で生まれ、生き、人生を終える  
Hezekiah L. Reade は、2 年間病氣と闘い Jewett 市の自宅で気管支と心臓病により亡くなる。リード家はイギリスから移住した。  
1827 年に Silas と Sarah の一人息子として Lisbon で生まれた。曾祖父はモヒカン族からコネティカット州に土地を買った。小さい頃は Lisbon の学校に通い、13 歳から Jewett 市に来て Plainfield でさらなる教育に励んだ。その後、数年間学校で講師として教えた。  
作家としても様々な本を書いたが、『Money -How to Make and Use It』はリード氏を作家としても有名にした本の一つである。  
1864 年に紙会社を買収し、会社は成功し、Reade paper Co. となる。  
1873 年 Jewett City で銀行を設立した。教会関係の仕事にも力を入れていたリード氏は誰もが信頼のおけるキリスト教執事であった。  
共和党の一人として、町を改善するのに携わった。また、アメリカの査定員としてアシストした時期もある。1867 年に夫に先立たれた Faith Bingham と結婚した。養女の Mary Ella Butler (Reade) は火山の噴火で亡くなった。Richiero Saika という日本人にも教育を受けさせた<sup>注2)</sup>。

Fig. 6. 新聞 The DAY. 1903 Jan 29; 3 の要旨<sup>2)</sup>

Academy で教育を受ける。

#### ・職業

青年期は、農場で働き、その後 16 年間学校で講師として勤務する。そのうち 5 年間は、Jewett 市で小学校の校長を務めた。

1864 年、農場での仕事に加えて、製紙工場を購入し、会社はリード製紙会社となった。5 年後、ニューヨークの著名な雑誌、ハース・ホーム雑誌に農業部門の責任者として迎えられ生涯を文学的事業に力を捧げた。リード氏は、文筆家であり彼の著作には『Money and how to Make it and Use it』、『Boys' and Girls' Temperance Books』、『Story of Heathen and His Transformation』、『The Way Out』などがある。

1873 年、Jewett 市に貯蓄銀行を作り、頭取に選出され生涯続けた。

#### ・教会との関係と社会貢献

1849 年に、禁酒と日曜学校に興味を持ち、1875 年から伝道 시작했다。公立学校による禁酒の義務教育の創始者であり、1881 年には(禁酒の)法案をコネティカット州議会に提出した。彼の書物は、Woman's Christian Temperance Union (キリ

スト教禁酒同盟)に取り上げられた。彼は教会および伝道の仕事で活躍し、出来る限りの協力を惜しまなかった。彼はコネティカット州伝道協会の会長であった。

#### ・結婚と養育

1867年、Faith Bingham Patridgeと結婚した。夫妻に子どもはなく、アメリカの学校で、Mary Ella Butler (Reade)を教育し、日本人キリスト教徒のRiechiro Saikiiに(アメリカとドイツ両国で)大学教育を受けさせた<sup>註3)</sup>。

養父の事業家として作家としてクリスチャンとしての生き方は、リードに多大な影響を与えたに違いない。

### V. リードの来日から帰国までの活動

リードは米国長老教会ニューヨーク婦人伝道局から宣教師として、米国長老教会在日宣教師団(在日ミッション)に派遣された。その目的は、Graham Seminary(新栄女学校)で女子教育に携わっていたK.M.ヤングマンが英語と音楽を教える女性を要望したことに端を発している<sup>9)</sup>。リードは、宣教師J.B.ポーターと英国船オセアニック号に乗ってサンフランシスコを出航し、1881年10月29日に横浜港に到着した<sup>9)</sup>。この時、1860年生まれのリードは21歳の若さであった。

来日後は築地居留地42番地にある新栄女学校で最初の仕事についた。新栄女学校は信仰を中心とする日曜学校が盛んであった。リードはここでアシスタントをしながら1日2時間教え、日曜学校も担当し参加者の人数も増えていった<sup>7)</sup>。リードは宣教師として女子教育に携わることを目的に来日し、布教活動を行っていた。

明治16年(1883)、リードは新栄女学校からフィラデルフィア婦人伝道局の運営のもとにあった番町の櫻井女学校に移り、M.T.ツルーが帰来している間(1883.10.23～1885.5.11)A.デイビスの教育を補佐していた。『フィラデルフィア婦人伝道局年報』(1884年版)には「ニューヨーク婦人伝道局のミス・リードはミセス・ツルーが不在の間、番町スクールで私たちの働き手に喜ばれる助力をしており、教師と生徒に慕われた」と記録さ

れている<sup>8)</sup>。

明治21年(1888)に発行された『東京慈恵医院第一報告』は、明治14年(1881)病院設立当初からの記録であるが、その中に「明治17年10月17日米国婦人リード氏看護法教授の為来院……」という記述がある。病院にいる看護婦の教育を担当する米国婦人リードの存在が明らかになった<sup>9)</sup>。この時リードは24歳であった。また、昭和9年(1934)発行の同窓会誌『恵和会報』の記事「教育所年表」には、明治18年1月7日-アメリカ合衆国「プレスビテリアン・チャーチ」ノ「ジャパンミッション」ナル「ミス・エム・イー・リード」と契約したと書かれている<sup>10)</sup>。契約期間は2年間であった。そして、明治20年(1887)2月に契約が終了した。リード27歳の時である。

リードは病院との契約が終了した後もしばらくは病院で仕事をしていたが、新栄女学校に戻り本来の女子教育の一環として生徒に音楽を教えていた。新栄女学校・櫻井女学校は後に女子学院になる。

リードは1888年に長老教会に辞任届けを提出し、5月19日、バンクーバー行きザンベジ号に乗って日本を発ち、7月に帰国している<sup>11)</sup>。帰国後のリードの生活や活動については養父に関する資料などを手がかりに調査している。

リードの日本での活動は、明治14年(1881)から明治21年(1888)の7年間である。この7年間にリードが果たした役割は、女学校の教師であり、看護婦養成の指導者であり、宣教師としての布教活動であった。

### VI. リードと高木兼寛との関わりについて

高木兼寛は看護婦教育所を開設するにあたり、看護指導者としてリードを招聘した。リードが有志共立東京病院に看護法教授のために来院しその後、看護婦教育所の教育に従事するようになった経緯については諸説ある<sup>12)</sup>。しかし、リードは自ら有志共立東京病院看護婦教育所の看護婦養成に参加したい旨を申し出ている。明治17年(1884)9月24日に高木兼寛の要請で米国長老教会在日ミッションの在京宣教師によって会議が開かれ、J.C.ヘボン、D.タムソン、J.C.バラら16名の

男女宣教師が参集した。この中にはリードも出席していた。「芝の病院と関係を持ちたいというリード嬢の申し出により、その件について高木博士と話し合いを持つための委員が指名された」とある。明治17年(1884)10月3日の在京浜宣教師会議の常任委員会で、リードが芝の病院で仕事をする件について許可された(宣教師A.V.ブライアンの報告)<sup>13)</sup>。この宣教師会議の結果、「明治17年10月17日米国婦人リード氏看護法教授の為来院す爾後毎週金・土の両曜日を以て教授の定日とす」<sup>9)</sup>となったのである。そして、明治18年(1885)1月6日にヘボン、ブライアン、T.M.マクネア、リードら13名の宣教師の出席のもと会議が開催され、リードが病院を定期的に訪れ、病院により影響を与えている事がわかり、彼女の仕事が高く評価された。その結果、1月7日に有志共立東京病院で働くことに関する契約がなされたのである(宣教師T.M.マクネアの報告)<sup>14)</sup>。

昭和9年(1934)発行の同窓会誌『恵和会報』の記事「教育所年表」の最初に「……リード女史は米国でナイチンゲール看護婦教育を受けられた方でありますから……ナイチンゲール看護婦制度によります学校がナイチンゲール女史が初めて英国に創設されましてから25年後に日本にも正規看護婦学校が出来上がったのであります……」と記され、つぎに具体的な年表が書かれている。中でも、明治18年(1885)1月7日にミス・エム・イー・リードと教育所所長であった高木兼寛との間でつぎの契約が交わされたことが記載されている<sup>10)</sup>。

- 1, リード氏ハ二カ年間無給ニテ有志共立東京病院ニ勤務スベシソノ職務ハ病院ノ規則ニ制定スル者ニ従フ但シ服務時間ハ一日四時間ヲ超過セザルベシ
- 2, リード氏ハ院内何レノ部ニ立入ルモ妨ゲナカルベシ
- 3, 下裨二名室ニツ生活用諸雑貨を供ス
- 4, リード氏ハ他ノ職務ニ差シ支エアラザル時ハ耶蘇宗ニ関スル事ヲ教訓スル事ヲ許ス

リードは2年間無給で病院に勤務したのである。また、イギリス留学でキリスト教について学び宣教師の職務を理解した高木兼寛の計らいであろうか、院内でキリスト教に関する布教をしてよいことが契約のなかに盛り込まれている。

リードが1880年代半ば(1883または84)に米国長老教会在日ミッションの在京浜宣教師たちと撮った写真がある(Fig. 7)<sup>15)</sup>。このときのリードは23歳か24歳である。

## VII. リードと看護指導

明治18年(1885)3月21日の『東京醫事新誌』第364号には「リード氏の演説, 米国の女教師リード氏は芝区共立東京病院へ日々午前より参られ看護婦に看護の方法を演説し又同氏は医師の依頼により1週間2回ずつ英語の教授をさるるよし」という記事から、今まで週2回であった来院が毎日となり、看護指導だけでなく医師に英語を教えていたことがわかる<sup>16)</sup>。

リードの看護指導に関するかかわりを示すものとして『東京慈恵医院第一報告』に明治17年7月から明治18年6月の寄附品一欄に「看護婦帽子8個 リード氏」の記載がみられる<sup>9)</sup>。リードが最初に寄附した品が、看護婦の象徴とされていた



Fig. 7. 「1880年代半ばの長老派東京ミッションのメンバー」リードは最後列の右側。小楡山ルイ・アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響。東京：東京大学出版会：1992. p.179. より一部改編<sup>15)</sup>

看護婦の帽子であった。さらに、明治18年7月から明治19年6月の寄附品欄にはリードからの寄附として「団扇 26本、哺乳器 1個、四布蒲団 1枚、看護婦前掛 26枚、看護婦帽子 46個」の記載がみられる<sup>9)</sup>。これらの品々はコネティカット州に住む両親の手を経て送られたものであろう。

米国でナイチンゲール看護婦教育を受けたと教育所年表に書かれているリードは、看護法を教授するのみならず、看護婦の服装を整え、職業としての看護のあり方を示したのであった。

リードが有志共立東京病院看護婦教育所で看護指導者として働いたのは、明治17年(1884)から明治20年(1887)であり、彼女の年齢は24歳～27歳であった。教育所の最初の看護婦生徒である1回生5名は21歳から26歳であった。さほど年の変わらない看護婦生徒にどのように接していたのであろうか。また、生徒も看護婦という新しい職業を目指して教師リードからどのような影響を受けたのであろうか。1回生は明治18年(1885)秋に生徒見習として採用され、明治21年(1888)2月1日に卒業した。この卒業生の中で優秀な成績であった鈴木キクは、のちに第3代看護婦取締になり、明治24年(1891)から明治34年(1901)の10年間教育所の牽引役としてその役割を果たした。教育所の基礎固めを行う時期にリードから直接教えを受けた鈴木キクの存在は大きい。そして、鈴木キクを育てたリードの功績は何ものにも代え難い。

リードの活動は本国に報告されている。1885年のニューヨーク婦人伝道局の年報によると、「リードは病人を担当している女性たちに衛生学と看護の知識を与えている。また、病院内におけるキリスト教の伝道も許可されており、入院患者にはイエスと彼の愛を説いている。」と書かれている<sup>17)</sup>。また、1886年の年報では、「リードは病院で貧しい病人の看護をし、慰め励ましている。彼女はトレインド・ナースになるために自分が看護を指導している日本人女性たちと一緒に、彼女たちのために建てられたこぎれいなレンガ造りの建物に住んでいる。この事は彼女の仕事の社会的評価を著している。」とある<sup>18)</sup>。1887年の年報では、「リードの病院における聖書のクラスは30人

で、そのうち15人はクリスチャンである。安息日の聖書のクラスが維持されている。彼女の指導したトレインド・ナースのクラスには仕事があり、病院の貧しい人々と裕福な階級とに費やす時間配分を行っている。」と書かれている<sup>19)</sup>。

リード自身が日本での自分の看護の教育の様子について書いている雑誌がある。それは、米国長老教会婦人伝道局の機関誌『Woman's Work for Woman and Our Mission Field』(1886)である。本の中にはリードが教えている看護婦生徒の絵とともに「病院には30人の看護婦が勤務し、彼女たちは今では看護婦と呼ばれることに誇りを持っている。病院にとっても愛着を持っていて派遣されるときは喜んで出かけ、再び喜んで戻ってきている。以前にはあった看護婦達の間のかんかやしつとや盗みがなくなってきた」などと書かれている(Fig. 8)<sup>20)</sup>。

リードは院内でキリスト教を布教することが許



Fig. 8. リードが書いた文章とともに有志共立東京病院看護婦教育所の学生のスケッチが掲載されている<sup>20)</sup>

されていた。有志共立東京病院看護婦教育所では、看護婦取締や生徒の中でキリスト教を信仰する者が多かった。第2代看護婦取締の松浦里や第3代取締の鈴木キクはクリスチャンであった。鈴木キクは、明治19年(1886)には、宣教師ジェームズ・バラから妹百とともに受洗している。また、那須セイとともに英国セント・トマス病院に留学した生徒の拝志ヨシネは、明治19年(1886)に新栄教会の石原保太郎牧師から受洗している。第2代看護婦取締の松浦里もキリスト教を深く信仰し、明治20年(1887)に新栄教会の石原保太郎牧師より受洗している。この時期は、松浦里が看護婦取締心得になった頃であり、リードとともに教会に通っていたのであろう。また、新栄教会の人名簿には有志共立東京病院看護婦教育所の生徒や有志共立東京病院看護婦の名前が数名見られる。宣教師としてのリードが懸命に布教活動につとめた結果であろう。また、キリスト教が看護婦という新しい職業を目指す女性達と異国から来日したリードとの間に精神的なつながりをもつよりどころになったのではないかと考える。

明治20年(1887)に、リードを13人の看護婦生徒が囲んだ写真が慈恵看護専門学校に現存している<sup>12)</sup>。この写真の裏には、「明治20年2月3日写」と書かれていることから、写真をとった時は、2年間の病院との契約が切れる時期にあたるので、記念写真であった確率が高い (Fig. 9)。

リードは病院との契約が切れた後もしばらくは



Fig. 9. 看護指導者のリードを囲んで有志共立東京病院看護婦教育所の生徒と明治20年2月3日写す。この時はリードと病院との契約が終了、記念に撮ったものであろう<sup>12)</sup>

仕事をしていたが、新栄女学校に戻り本来の女子教育の一環として生徒に音楽を教えている。新栄女学校で明治20年(1880)頃に100名の生徒と校長のビゲローの隣に並んで写した写真がある<sup>21)</sup>。

リードは、明治21年(1888)5月19日に帰国したが、1888年9月17日に築地新栄教会の杉森比馬、石本三十郎長老および石原保太郎牧師連名の書簡がアメリカ長老教会海外伝道局書記のジョン・ギレスピー博士宛に送られた。内容は「……とりわけ感謝しておりますのは、先頃帰国されたリード嬢で、私どもの教会にとって大変ご援助いただいた女性宣教師の一人でした。彼女が東京慈恵医院と契約中には、いつも看護婦たちを私どもの教会へ連れてきてくださいました。その多くは改宗し、私どもの教会に入りました。この間、彼女は病院の中であって救い主が医者にそうするように、看護婦たちを導き、大変成果をあげました。事実、そこでは彼女を介して、かつてないほど期待の持てるかたちで発展したのです。この国では彼女のような人を多く必要としています。私どもの教会だけでなくこの国にとっても大変な損失です。彼女の滞在期間が長くなかったことは大変残念ですが、彼女を派遣してくださったことに心より感謝致します。」と書かれている<sup>22)</sup>。

リードは帰国前に、在日ミッションの執行部との間に何らかのトラブルを生じ、父親をも巻き込んだという宣教師の手紙があるが、詳細は不明である。新栄教会の牧師達の書簡は、リードの日本における布教活動の有用性を示すものである。

## VIII. リードの死

リードは1902年5月8日に死亡した。墓地の死亡記載は、養父と同じNew London County, Connecticut, USAとなっている。しかし墓石には養女であることの外に「KILLED BY FIRE FROM MT. PELEE IN HARBOR OF ST. PIERRE ISLAND OF MARTINIQUE MAY 8 1902」と刻まれている (Fig. 2)。

火山の噴火により、リードが死亡する原因となったマルティニーク島にあるプレー山は、海拔1,397メートルの活火山である。北アメリカにあるフランス県マルティニーク島はカリブ海に浮か



ぶ西インド諸島の島で、北にドミニカ国を南にセントルシアがあり、大西洋とカリブ海が見える美しい島である。島にあるプレー山が1902年5月8日午前8時頃噴火し、火砕流が流れ、マルティニーク島にあるサン・ピエールを全滅させ、30,000人余の命が奪われた。

リードはこの時42歳であった。彼女は体調を崩し、マルティニーク島の近くを船で旅行中、プレー島の噴火により、大やけどを被い、数時間後に亡くなった。旅行中のできごとで、一瞬にして奪われた命であった。彼女の遺体は実家に運ばれ、Jewett市の墓地に埋葬された<sup>3)</sup>。

## IX. 終わりに

有志共立東京病院看護婦教育所の最初の看護指導者ミス・リードは、42歳の生涯であった。その生涯の中の21歳から7年間で日本を過ごした。若いリードにとって宣教師として女学校教師として看護指導者として精一杯の日々を過ごしたと思われる。

リードの墓石は、養父によって建てられたものであろう。墓石には火山の噴火で娘を亡くした父としての無念が刻まれていると同時に、「A MISSIONALY IN JAPAN SEVEN YEARS」の文字は、熱心なクリスチャンであり伝道者であった彼が日本で活躍した娘を誇りに思う気持ちの現れではないだろうか。養父は1903年に、養母は1904年に相次いで亡くなっている。

慈恵看護教育130年の年に、今まで探し続けてきたリードの墓が発見され、フルネームと生年と没年および養父母のことが明らかになった。しかし、リードがどこで看護の教育を受けたか、帰国後どのような生活を送っていたかについては継続調査中である。

長年の懸案であったリードの生年と没年、フルネームなどを明らかにするために専門的な研究手法で資料の収集にご協力いただいたMrs. Varginia Nutaに深謝致します。

著者の利益相反 (conflict of interest : COI) 開示 :  
本論文の研究内容に関連して特に申告なし

## 注

注1) リード家の墓所の記録の掲載については、記載者 Vickye Blathwick (3/21/2014) の許可を得ている。

注2), 注3)

新聞記事にある Richiero Saika と本の中に出てくる Riechiro Saikii は同一人物である可能性が高い。日本名は佐伯理一郎 (1862-1953) ではないだろうか。彼は1884年に小崎弘道から受洗。同年海軍軍医となり、1886年渡米、88年ペンシルヴェニア医科大学医学部を終え、1888年、渡欧。

ミュンヘン大学ウインケル教授に学び、ライプツヒ、ベルリン、エジンバラを訪問し1891年帰国した。「日本人キリスト教徒の Riechiro Saikii にアメリカとドイツ両国で大学教育を受けさせた」という資料と留学先は一致している。佐伯が留学中であった1886年から1891年は Hezekiah L. Reade は Jewett City Saving, Bank の頭取として、また、教会関係でも幅広く活躍していた時期である。

リードの養父が佐伯理一郎を援助していたとすれば、佐伯が1897年に京都看病婦学校の経営を引き継ぎ看護婦養成にあたったことは興味深い。

引き続き調査し検討したい。

## 文 献

- 1) Hirao M, Haga S, Kohiyama R. M. E. Reade: The pioneering educator of nurses in Meiji Japan. *Jikeikai Med J.* 2010; 57: 113-9.
- 2) Hezekiah L. Reade dies at age 75. *The DAY.* 1903 Jan 29; 3. <https://news.google.com/newspapers?nid=SrsqWtBqNIQC&dat=19030128&printsec=frontpage&hl=en>. [accessed 2015-11-18]
- 3) Genealogical and biographical record of New London County, Connecticut: containing biographical sketches of prominent and representative citizens and genealogical records of many of the early settled families. Chicago: J.H. Beers & Co.; 1905. p.121-2. <https://archive.org/stream/genealogicalbiog1905chic/page/n3/mode/2up>. [accessed 2015-11-18]
- 4) Herndon R, Burton R. Men of progress; biographical sketches and portraits of leaders in business and professional life in and of the state of Connecticut. Boston : New England magazine; 1898. p.57-8. <https://archive.org/details/menofprogress00hern>. [accessed 2015-11-18]
- 5) Letter written by Knox dated May 18, 1880, in Records of U. S. Presbyterian Missions, Japan Letters, Presbyterian

- Historical Society.
- 6) The Japan Gazette. 1881 Nov 8.
  - 7) 平尾真智子. 日本における看護婦養成の開始とアメリカ女性宣教師の役割: リード・ツルー・リチャーズの活動を中心にして. 山梨看大紀要. 1999; 1: 17-27.
  - 8) Annual report of the Women's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church, Vol.14. Philadelphia: Press of Henry B. Ashmead; 1884.
  - 9) 東京慈恵医院第一報告. 明治21年.
  - 10) 東京慈恵会医院教育所同窓会編. 教育所年表. 東京慈恵会医院恵和会報. 第2号. 1934.
  - 11) Japan Weekly Mail. 1888 May 26.
  - 12) 慈恵看護百年史編集委員会 編. 慈恵看護教育百年史. 東京: 東京慈恵会; 1984. p.21-8.
  - 13) Letter by A.V. Bryan dated October 3, 1884. in Records of U.S. Presbyterian Missions, Japan Letters, Presbyterian Historical Society.
  - 14) Letter by T. M. MacNair dated Jan. 6, 1885 in Records of U.S. Presbyterian Missions, Japan Letters, Presbyterian Historical Society.
  - 15) 小檜山ルイ. アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響. 東京: 東京大学出版会; 1992. p.179.
  - 16) 東京醫事新誌. 1885: 364.
  - 17) Annual Report of the Women's Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church. New York. New York: Women's Foreign Missionary Societies of the Presbyterian Church; 1885.
  - 18) Annual Report of the Women's Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church. New York. New York: Women's Foreign Missionary Societies of the Presbyterian Church; 1886.
  - 19) Annual Report of the Women's Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church. New York. New York: Women's Foreign Missionary Societies of the Presbyterian Church; 1887.
  - 20) Woman's work for woman and our mission field. vol.1. New York: Women's Foreign Missionary Societies of the Presbyterian Church; 1886. p.205.
  - 21) 田村直臣, 浅田みか子 編. 女子學院五十年史. 東京: 女子學院同窓會; 1928. 口絵写真.
  - 22) Letter by Tokyo Mission to Gillespie dated September 17, 1888 in Records of U.S. Presbyterian Missions, Japan Letters, Presbyterian Historical Society.